

最終章
瞳ニ映ル未来
【春草／現代エンド】

見上げれば、赤い月。夜空にぼっかりと、まあるい穴が覗いている。どこをどう歩いたのか……。喧噪が聞こえる。その方向へと、私はゆっくりと歩を進めた。

「あれ……？」

そうだ、私は日比谷公園にやって来たんだ。今夜は満月だから。でも足を運んだその場所は、いつもの雰囲気とはまったく違う。奥には神社まであるようだった。頭上にはかわいい提灯が連なり、その下にずらりと並ぶ屋台。子供たちがはしゃいでいる。調子はずれな音楽に、道端で芸を披露する大道芸人たち。……どうやら今日は、縁日だったらしい。思わぬ人混みの中で、私はきよろきよろと周囲を見回した。

（チャーリーさんはどこにいるんだろ）

またいつものようにふらりと現れるとは思っただけ。

「やあ、芽衣ちゃん」

案の定、チャーリーさんはどこからともなく現れた。

「いやあ、会えてよかったよ。探しても探しても見つからないから、そろそろ帰ろうかと思っていたところなんだ」

「……勝手に帰られたら困るんだけど」

（危なかった！）

得体の知れないこの人のことだから、約束を反故にされたって不思議じゃない。

「今日がお祭りだったなんて知らなかった」

「満月の夜はね、生き物の血が沸き立つのさ。じっとしてはいられなくなる。そして……」

彼は目を細め、大きく腕を広げた。

「少し不思議なことが起こりやすくなるんだ。僕の奇術が時空の壁を壊し、君をこの時代に運んだようにね」

「その壁、ちゃんと直しといたほうがいいと思うけど……」

これ以上犠牲者を増やさないために、と私はつけ加えた。

「はは、でも楽しかったろう？」

（人の気も知らないで）

気楽そうに話す奇術師に、少し腹が立った。楽しいとか観光気分ですべてほしくない。

「君はこの時代でさまざまな人々と出会った。そして、離れがたいほど、大切な存在だと考える人にも出会ったんじゃないかな？」

なんだか悔しくなって、私はそっぽを向いた。

「……さて、あいさつはこれぐらいにしておいて、と」

居住まいを正し、チャーリーさんは私に向き合った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？ さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。現代に帰らなきゃ……。と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……。へえ？ あんなに帰りたいた言っていたのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ?)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの?)

私がいなくなったなら、あの子はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

(あれ……)

遠のいたはずの喧噪が、気づいたら私の周囲に戻っていた。

陽気な祭り囃子も、人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

「……ねえ、芽衣」

(えっ?)

私の隣には春草さんがいる。私と手をつないだまま、いつものように無表情で。

「どうしたんですか、こんなところで」

「なに言ってるの。家に帰るんだろ」

さも当たり前のように、春草さんは言った。

（家に帰るって……）

不思議なことに、彼の足はあの屋敷とは逆方向に向かっている。

（これは夢？ それともチャーリーさんのマジックなの？）

どれが夢でどれがマジックなのか、私にはわからない。ここにいる春草さんの手が温かいということだけしか、わからない。

「春草さん、私」

いったい、なにから話せばいいんだろう。

「私、迷っていて……」

現代に帰るべきなのか。本当にそれでいいのか。

すると春草さんは、私の手を強く握りしめた。

「君は迷う必要なんてない」

「え……」

「1人では帰らせないよ」

そうやって、春草さんはかすかな笑みを口元に浮かべた。

(そっか。1人じゃないんだ……)

私が迷う必要はない。その言葉で、安堵の気持ちが心を満たしていく。

「さあ、行くよ」

「……はい」

私と春草さんは、歩調を合わせて歩いて行く。

ここではない場所へと。未練も心残りもすべて引き連れて――。

(帰りたい。春草さんと一緒に)

はるか先に待っている、あの家へと。

(春草さんと一緒に……)

*

――まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

(ここは……)

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前――

「さあ、お立ち会いお立ち会い！手前ここに取りい出したる陣中膏じんちゅうこうはこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんじよそこらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

――私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜。

あの夜に訪れた縁日だ。

そして私の隣には、春草さんがいる。

彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた。

（どうして、ここに……？）

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。

どうやら私と春草さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

*

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。成績は中の中、多くはないけど少なくともない友達に囲まれ、平凡な高校生活を送っていた。家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫檀したんの文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが大好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

*

——それから1年後。

明治時代から現代へとやって来た春草さんは、今もあの屋敷で絵を描き続けている。春草さんの絵はすぐに美術商の目に留まり、今では謎の新人日本画家としてあちこちの画廊で個展を開くまでになった。

なにより嬉しかったのは、一時は網膜炎を患って失明を危ぶまれていた春草さんの目

が、現代の医学によって完治したこと。

もう、春草さんの筆を邪魔する物なものもない。春草さんは現代に残り、現代で生きていくことを決めた。

そして、あの黒猫は――。

『黒き猫』という題名がつけられたあの絵は、現代まできちんと受け継がれ、とある美術館に展示されている。

きつと今頃は、例の澄ました顔で、多くの来館者たちの目を楽しませているに違いない。あの絵が次の時代に受け継がれていくのを、私はこれからもずっと見守っていくつもりだ。

――もちろん、春草さんと一緒に。

*

青い空と、白い雲と、緑色の芝。

明治時代と何も変わらない色のはずなのに、この時代に帰ってきたばかりの私には、

すべてが色鮮やかに映った。

実際、この時代はさまざまな色であふれ返っている。町の看板、本の装丁、人々が着ている服。それらの色使いは、明治時代とは比べ物にならないぐらいカラフルだ。

そして春草さんは、このカラフルな世界を、かなり興味深く感じているようだった。

休日にはカメラを持って、色を写真に収めるために、よく街へ繰り出している。

「ほら見て。こんなにたくさん野良猫がいる」

——今日来ているのは、猫がたくさん住み着いていることで有名な公園だった。

「まったく、昼間から公園で昼寝とはいいい身分だ。自堕落すぎるにもほどがある」

辛辣な言葉とは裏腹に、その瞳は輝いている。あいかわらずそういうところは素直じゃない。

「猫は昼寝するのが仕事みたいなものじゃないですか」

「そうやって人間が甘やかすから、やつらは調子に乗るんだ」

「はあ……」

ぶつくさと文句を言いながら、春草さんのかまえるレンズはどんどん猫に近づいていく。

「……まったく、許せない。こんなに自堕落なのになぜこれほどまでに美しい姿をして

いるんだ。ピンと伸びたヒゲといいビー玉のような目といい、まさに芸術そのもの……！
ああ、その罪作りな尻尾……許せない、断じて許せないよ……っ」

「みやあ！」

「ああっ、待ってくれ！ 猫！」

興奮した春草さんの声に驚いた猫たちが、蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ出した。

「猫……」

春草さんは膝から崩れ落ちると、猫が逃げていった方向に震える手を伸ばす。……どうやら、この時代に来て、画家モードは健在のようだ。

「あの、春草さん……」

「なに？ どうしたの？」

「いえ、今、我を失ってたみたいですけど」

「俺が？ はは、なにを馬鹿なことを」

鼻で笑われ、一蹴されてしまう。やはり自覚はないみたいだ。

「それにしても、このデジカメ……というやつは実に便利な道具だ。俺が明治にいた頃は、写真館に行かなければ写真なんて撮れなかったのに」

「そういえばそうでしたね」

「今では、この機械さえあれば誰でも簡単に写真屋になれる。しかも色つきの写真が撮れるんだ。こんなに美しい写真が撮れてしまうと、もはやこの時代に絵なんて必要ないんじゃないかと思ってしまおう」

「そ、そんなことないですよ」

このまま写真家に転向でもしてしまいそうな絶賛っぷりに、私は身を乗り出して否定した。

「……ああ。もちろん、わかってる。絵と写真は別物だ。それを証拠に、この公園にも絵を描いている人はたくさんいる」

春草さんは公園をぐるりと見回し、唇の端を上げた。

「時代が変わっても、自然を愛で、美しいものをこの手で表現したいと思う人の気持ちは同じなんだ……驚くべきことに」

嬉しそうな彼の様子を見てたら、私も自然と笑みがこぼれた。時代が変わっても、春草さんの芸術を愛する心は変わらないままだ。

「……………」

「？ どうしたんですか？」

どこことなく遠い目をしたように見えて、そうたずねると、

「……いや。ちょっと、あの黒猫のことを考えていたんだ。せめてあの黒猫の絵ぐらいは、この時代に持ってきたかったなと思って」

「あの絵なら、この時代の美術館に展示されてますけど」

「え……？ まさか」

春草さんは、その目を白黒とさせた。いつもクールな彼にはめずらしいリアクションだ。

「本当ですよ」

『黒き猫』と名づけられたあの黒猫の絵は、今でも大切に展示されている。

私が嘘や冗談を言っているようには見えなかったのか、春草さんは柔和な表情で髪をかき上げた。

「そうか……。よくわからないけど、俺の絵はこの時代まで残っているんだ」

「一緒に観に行きましょう。近いうちに」

「………。まあ、気が向いたら」

言葉はそっけないけど、その横顔は確実に照れている。それを指摘したら怒られそうなので、あえて触れないことにした。

「ふふ。春草さんって本当に猫が好きですよね」

「……別に好きじゃないって言うてるだろ。俺が猫に発情するような奇特的な男に見えるわけ」

「そ、そこまでは言ってますけど」

「……そう？ 俺はてつきり、君が猫に嫉妬でもしてるんじゃないかって思ったけど」
そう言いながら、春草さんは私に近づいてくる。

「こんなに君のこと大事にしているのに、まだ伝わっていない……ってことはないよね」
「え……」

「はあ……。いったいどうしたら信用してもらえるのかな」
大げさな仕草で首を振り、春草さんが私に顔を寄せてきた。

「ねえ……どうしたら信用してくれるの」

「どうって……」

「もしかして、無理矢理信用させるしかないのかな」

「……ふ……っ」

堂々と重ねられた唇に、私は思わず息を呑む。

「……どう？ 今の口づけは、信用できる口づけだった？」

「そ、そんなこと……言われても」

不意打ちのキスに驚いて、うまく頭が回らない。周囲の人の視線などものともせず、春草さんは再び顔を近づけてきた。

「1度だけじゃわからない？ なら、もう1度……」

「……っ」

「どう？ 信用した？ 信用してもらえらるまで、何度だつてするよ」

「……意地悪しないでください」

「別に意地悪でしているわけじゃない。ひどい言われようだな」

薄く笑みを浮かべながら、春草さんは私の耳に触れた。くすぐるようなその動きに、膝から崩れ落ちそうになる。

「俺は君のことばかり考えているっていうのに……。どっちが意地悪なんだか」

「……」

私が頬を赤らめつつ、ぷっくりと膨らませていると、春草さんはくくつと声を出して笑う。

「なに怒ってるの。頬なんか膨らませてないでさ、笑いなよ」

「わ、笑ってます」

「嘘つくなよ。いつもはもっとかわいく笑うだろ」

「っ……!!」

柄にもないような発言に驚いている隙に、春草さんは私の肩をぐっと抱き寄せた。そしてカメラを掲げると、レンズを私たちのほうへと向ける。

「ほら、撮るよ」

「えっ、ちよつと待っ……」

「待たない。ほら、笑って。笑ってなよ。……ずっと、俺の隣で」

「……はい」

自然とこぼれた、2つの笑顔。

瞬間、時を止めるシャッターの音。

そんな私たちの足元で、子猫が『にゃあ』と、かわいい鳴き声を上げた。

）
F
I
N
（